

コンピュータ利用による最初期 ガータにおける身体について

橋 本 哲 夫

kāya は普通「身体」と訳される。また「集まり」ともいわれる。しかし、それだけであろうか。市川氏が指摘する「身」のもつ多様性がないのだろうか⁽¹⁾。メルロ・ポンティのいうところの「身体主体」という側面はないのだろうか⁽²⁾。

ある特定のテキスト内での、ある語の語義を研究しようとした場合、その語の同格語、その語を主語とする動詞、その語が目的語である動詞 etc. の全用例から、その語の意味を導き出すという方法が考えられる。例えば、「xxxo yyyyo」という表現があり、yyyyo の用例がすべて「生物」にのみ使用されていれば、[xxxo] もまた「生物」の一種と考えてよいのではないだろうか。そして、これを他の表現においても繰り返すことによって、xxxo の語義が導きだされるのではないだろうか。

その場合、テキストに対して、何度も検索をしなければならないが、この時にコンピュータを利用すれば、検索に要する時間が大幅に短縮される。そのため、筆者はテキストを最初期のガータとし、1 行に 1 ガータの形式で、*Sutta-nipāta*, *Sagātha-Vagga* (*Samyutta-nikāya* vol. 1), *Thera-gātha*, *Therī-gātha*, *Dhamma-pada* の全ガータを「g-only」というファイル名で入力した⁽³⁾。このファイルと前述の方法を使った kāya (ただし、コンパウンドは除く) の語義推定の一部をここに紹介する。

1. *avijjāya nivuto kāyo* (kāya は無明に覆われている *Thag.* 572)——*nivuta* は *sabbaloka* (*Sn.* 348), *sabba-samaṇabrāhmaṇa* (*Sn.* 1082), *akissava* (愚人 *SN.* 1. p. 149), *loka* (*Sn.* 1032) についても使われる。*loka* と *sabbaloka* には、「人」以外の意味もあるが⁽⁴⁾, *samaṇabrāhmaṇa* と *akissava* (愚人) については、「人」以外は考えられない。従って、kāya も「人」と考えられる。また、*Sn.* 1032 には *avijjāya nivuto loko* とあることから、kāya は「人々」とも考えられる。

2. *Lahuko vata me kāyo phutṭho ca pītisukhena vipulena* (私の *kāya* は、崇高な喜びと楽しみに触れて、軽やかです *Thag.* 104)——*phutṭha* は *bhikkhu* (修行者 *Sn.* 923), *anoka* (家なき人 *Sn.* 966), *bāla* (愚人 *Thag.* 783), *dhīra* (賢者 *Thag.* 783), *paṇḍita* (賢者 *Dhp.* 83) について使われる。すべて「人」である。また、直接には書かれていないが、前後のガータから推定されるものには、「神がみと人間」*Sn.* 268), 「修行者」(*Thag.* 31, 244, 683), 「私」(*Thag.* 882) がある。全て「人」なので、*kāya* も「人」と考えられる。

3. *bhijjati kāya* (*kāya* が壊れる *Thig.* 95), *bhijjatu'yaṃ kāyo* (*Thag.* 312), *bhijjissati kāyo* (*Thag.* 718)——*bhijjati* は *pūtisandeha* (汚れた身体 *Dhp.* 148) についても言われる。インド哲学一般としては、*sandeha* は「疑い」を意味するが、中村博士に従う⁽⁵⁾。同所の前半では、*rūpa* が朽ちる (*parijjāna*) とも言われる。また、*sandeha* は捨てる対象 (*Thag.* 20), 烏が啄むもの (*Thag.* 599) であるので、*kāya* は「物質的な身体」と考えられる。

4. *kāyo kilamati* (*kāya* は疲れる *Thag.* 1073)——*kilamati* は *punappunaṃ kilamati phandati ca* (繰り返し繰り返し、疲れ、また苦しみ勞する。前後より主語は「愚人」*SN.* 1, p. 174) にも使われるので、*kāya* は、「生理的身体」と考えられる。

5. *kāyassa bheda* (*kāya* が破壊された後で *Thag.* 493, 534, *Dhp.* 140.)——*bheda* は一般的な用例の他に、*sarīrabheda* として使われる (*Thag.* 788) これは、*sarīrassa bheda* と分解し得るので、*kāya* は、*sarīra* と同質の部分があると考えられる。*sarīra* は、*manussa* と対比して使われるので (*Sn.* 611), 「人間」以外の生物の身体と考えられる。また、*kāya* と区別して使われる (*Thag.* 1033) 場合は、*kāya* よりも快楽に強く結び付いている。さらに、*antima-sarīra* (最後の身体) は繰り返し言われるが、*antima-kāya* とは言われない。「輪廻思想」と照らし合わせれば、*sarīra* は、*kāya* より一般的な「身体」と言うことになる。*bhedana* の形では *matikabhejanā sabbe bhedanapariyantā* (土の器が壊れる *Sn.* 577), *bhedanadhamme kaḷevare* (身体は壊れる性質のものである *Thig.* 380) と表現される。また、*kaḷevara* (= *kalebala*, *kalabara*) は「血と肉で塗られ、虫たちのすみかであり、烏どもの餌食であり、いやなものです」(*Thig.* 467), 「はかないものであり、骨と筋肉との集合で、唾液や、涙や大小便に満ち、腐敗してゆく」(*Thig.* 470) といわれる。したがって、*kāya* は「容易に壊れる、合成された物質的肉体」と考えられる。

6. *kāyo sandati pūtikāṃ* (臭い水を流す *Thag.* 568)——*sandati* は *nava-sota*

(52) コンピュータ利用による最初期ガータにおける身体について (橋 本)

(九つの流れ *Thag.* 1151, 279), *itthi-sota* (女性の流れ *Thag.* 739) にも使われる。「流れ」が「流れる」となる。「九つの流れ」ということからこの *kāya* は「肉体」と考えられる。

7. *kāyam asuciṃ* (不浄 *Thig.* 33)——*asuci* は *manussa* (人 *Sn.* 75), *dipādaka* (人 *Sn.* 205; *Thag.* 453), *samussaya* (肉体 *Thag.* 394; *Thig.* 19, 82), *gandha* (香 *SN.* 1, p. 226), *kāma* (愛 *Thig.* 225), *pūtikāya* (不浄な *kāya* *Thig.* 466) に対しても言われる。*dipādaka* は更に、「悪臭を放ち、(花や香を以て) 護られている。種々の汚物が充満し、ここかしこから流れ出ている」といわれ、「肉体」と考えられる。*samussaya* は「食物に依存する」(*Thag.* 123), 「老いる」(*Thig.* 270) ことから、「肉体」となる。*kāma* は、「肉体的愛欲」である。「香」は、肉体の香である。このように、*asuci* は *manussa* 以外は、「肉体」について使われている。従って、ここでの *kāya* も「肉体」の可能性が高いと考えられる。

8. *kāyena saṃvaro* (*kāya* について慎む *Dhp.* 361; *SN.* 1, p. 73では *saṃvaro = samvaro*)——*ins.* を支配する *saṃvara* は、直前の *Dhp.* 360 で *cakkhunā, sotena, ghānena, jivhāya* についても使われることから、この *kāya* は感覚器官の一つとしての「身体」と考えられる。一方、*Dhp.* 361 では *vācā, manas* について言われるので、*kāya* は *Sn.* 193 にその活動が説かれるところの「胴体と四肢」であると考えられる。

9. *kāyena saṃvuto* (*kāya* を慎む *dhp.* 225)——*ins.* を支配する *saṃvuta* は、*vācāya* (*Dhp.* 232), *manasā* (*Dhp.* 233), *tīhi* (*Dhp.* 391) に対して使われる。*Thig.* 15 には *kāyena saṃvutā āsīm vācāya uda cetasā* とまとめられている。*Thig.* 234 にも同様のまとめがある。また、*tīhi* (*Dhp.* 391) は明かに *vācā, manas, kāya* である。この *kāya* も *Sn.* 193 にその活動が説かれるところの「胴体と四肢」であるとかんがえられる。*comp.* では、*saṃvutindriyo* (*Thag.* 682, 1081) と表現されるので、この *kāya* も感覚器官の一つとしての「身体」と考えられるが、分解された形では、*loc.* 支配のようなので (*saṃvuto pātinokkhasmim indriyesu ca pañcasu* : *Sn.* 340), この場合の *kāya* は、感覚器官でないと考えられる。

10. *oghasaṃsidano kāyo* (*kāyo* は激流に沈む)——*oghasaṃsidano* このコンパウンドはこのみであるが、*saṃsidati* では *bhikkhu...saṃsidati mahoghasmim* (*Thag.* 681) として、*bhikkhu* が主語であり、*sīdati* では、「歓楽の生活の尽きた人」(*SN.* 1, p. 53; *Sn.* 175), 「立派な人」(*Thag.* 147) が主語であり、*visīdati* で

は「愚者」が主語である (*Dhp.* 171; *SN.* 1, p. 7)。その他の用例も「沈む」という意味では主語は「人」である。したがって、ここでの *kāya* も「人」と考えられる。

11. *kāyamz mamāyanti* (わがものと見なす *Thag.* 575)——*mamāyati* の対象として *kiñci lokasmi* (*Sn.* 922), *pūre* (*Thag.* 1150 対格と考える⁽⁶⁾) が言われる。*pūra* には「九の流れ」(*Thag.* 1134; *Thag.* 279) があるとされることから、この *kāya* は「肉体」と考えられる。

12. その他、用例が一般的等で *kāya* の語義推定に役立たなかったもの。——*bhidura* (壊滅すべきもの), *ganthita* (縛られた), *otthata* (捉えられた), *lahuka* (軽い), *apetaviññāna* (意識を失った), *ditṭhita* (みられた), *santarabāhira* (内外ともに *nagara* 「城壁に護られた都市⁽⁷⁾」と *saṁkha-mutta* 「真珠の母」に使われる), *tuccha* (空虚), *yutta* (結び付けられた), *paṭicchanna* (覆われた), *yantita* (動かされた), *añña* (他の), *sucita* (多彩な), *pheṇa-upama* (泡のようなもの), *marīci* (かげろう。 *marīcika* は *loka* についても言われる), *kunbha* (水瓶), *anicca* (無常), *pannaga* (蛇), *nikkhipati* (捨てる), *pharati* (喜びで満たす), *upakaroti* (大切にする), *pilavati* (ただよう, 震える), *paleti* (行く), *sobhati* (美しい), *vasati* (住む), *sāti* (流れて行く), *adhiseti* (横たわる), *chanda* (欲。 *kāya* 以外の対象は, *dhamma*, *loka*, *kāmaguṇa*, *bhava*, etc), *niḥbindati* (嫌悪する。 *kāya* 以外の対象は, *loka*, 苦, この世とあの世, 自分の色, 迷いの生存: *bhavagata*, ゴータマ), *apekkha* (顧慮), 等。

1) 市川浩「身の構造」(弘文社『講座・現在の哲学② 人称の世界』昭和53年) 参照。

2) R.C クワント著滝浦静雄他訳「メルロー＝ポンティの現象学的哲学」(国文社昭和56年) 参照。

3) 約600キロバイト。1単語の検索には、約1分かかる。入力に際して、PCR-SWAN (文字認識ソフト。株式会社「パーズ情報科学研究所」製) を使用した。キーボードからの入力よりは、高速で、正確であるが、誤入力は避けられない。原因の大部分はPTS 本の活字の悪さである。

4) 拙稿「原始仏教における *loka* について(Ⅲ)」(『印度学仏教学研究』第32巻第1号) 参照。

5) 中村元「仏弟子の告白」(岩波書店 1982年) *Thag.* 20 に対する注記参照。

6) 同 *Thag.* 279 に対する注記参照。

7) 中村元「ブッダの真理の言葉・感興の言葉」(岩波書店 1978年) *Dhp.* 315 に対する注記参照。

〈キーワード〉 コンピュータ, パーリ語, *kāya*

(東方研究会専任研究員)